

鴉

——ひそひそ聞える。なんだか聞える。

太宰治

青空文庫

鷓かもめといふのは、あいつは、唾おしの鳥なんだつてね、と言うと、た
 いていの方は、おや、そうですか、そうかも知れませんね、と平
 気で首肯するので、かえつてこつちが狼ろうばい狽ばいして、いやまあ、な
 んだか、そんな気がするじゃないか、と自身の出鱈目でたらめを白状しな
 ければならなくなる。唾は、悲しいものである。私は、ときどき
 自身に、唾の鷓を感じることもある。

いいとしをして、それでも淋さびしさに、昼ごろ、ふらと外へ出て、
 さて何のあても無し、路みちの石塊を一つ蹴つてころころ転がし、ま
 た歩いていって、そいつをそつと蹴つてころころ転がし、ふと気
 がつくと、二、三丁ひとつの石塊を蹴つては追つて、追いついて

は、また蹴つて転がし、両手を帯のあいだにはさんで、白痴の如く歩いているのだ。私は、やはり病人なのであろうか。私は、間違っているのであろうか。私は、小説というものを、思いちがいでしているのかも知れない。よいしょ、と小さい声で言ってみて、路のまんなかの水たまりを飛び越す。水たまりには秋の青空が写つて、白い雲がゆるやかに流れている。水たまり、きれいだなあと思う。ほつと重荷がおりて笑いたくなり、この小さい水たまりの在るうちは、私の芸術も拠^よりどころが在る。この水たまりを忘れずに置こう。

私は醜態の男である。なんの指針をも持っていない様子である。私は波の動くがままに、右にゆらり左にゆらり無力に漂う、あの、

「群集」の中の一人に過ぎないのではなからうか。そうして私はいま、なんだか、おそろしい速度の列車に乗せられているようだ。この列車は、どこに行くのか、私は知らない。まだ、教えられていないのだ。汽車は走る。轟々ごうごうの音をたてて走る。イマハ山ヤマナ中カ、イマハ浜ハマ、イマハ鉄橋、ワタルゾト思ウ間モナクトンネルノ、闇ヲトオツテ広野ヒロノハラ、どんどん過ぎて、ああ、過ぎて行く。私は呆然ぼうぜんと窓外の飛んで飛び去る風景を迎送している。指で窓ガラスに、人の横顔を落書して、やがて拭き消す。日が暮れて、車室の暗い豆電燈が、ぼつと灯ともる。私は配給のまずしい弁当をひらいて、ぼそぼそたべる。佃煮つくだにわびしく、それでも一粒もあますところ無くたべて、九銭のバットを吸う。夜がふけて、寝なけ

ればならぬ。私は、寝る。枕の下に、すさまじい車輪疾駆しつুকの叫きよう喚かん。けれども、私は眠らなければならぬ。眼をつぶる。イマハ山中、イマハ浜、——童女があわれな声で、それを歌っているのが、車輪の怒号の奥底から聞えて来るのである。

祖国を愛する情熱、それを持っていない人があるうか。けれども、私には言えないのだ。それを、大きい声で、おくめんも無く語るといふ業わざが、できぬのだ。出征の兵隊さんを、人ごみの陰から、こつそり覗のぞいて、ただ、めそめそ泣いていたこともある。私は丙種へいししゆである。劣等の体格を持って生れた。鉄棒にぶらさがつても、そのまま、ただぶらんとさがっているだけで、なんの曲芸も動作もできない。ラジオ体操さえ、私には満足にできないので

ある。劣等なのは、体格だけでは無い。精神が薄弱である。だめなのである。私には、人を指導する力が無い。誰にも負けぬくらいに祖国を、こつそり愛しているらしいのだが、私には何も言えない。なんだか、のどまで出かかっている、ほんとうの愛の宣言が私にも在るような気がするのであるが、言えない。知っていないが、言わないのではない。のどまで出かかっているような気がするのだが、なんとしても出て来ない。それはほんとうにいい言葉のような気もするのであるが、そうして私も今その言葉を、はつきり掴つかみたいのであるが、あせると尚なおさら、その言葉が、するりするりと逃げ廻る。私は赤面して、無能者の如く、ぼんやり立ったままである。一片の愛国の詩も書けぬ。なんにも書けぬ。あ

る日、思いを込めて吐いた言葉は、なんたるぶざま、「死のう！
バンザイ。」ただ死んでみせるより他に、忠誠の方法を知らぬ
私は、やはり田舎いなかくさい馬鹿である。

私は、矮わいしやう小無力の市民である。まずしい慰問袋を作り、妻
にそれを持たせて郵便局に行かせる。戦線から、ていねいな受取
通知が来る。私はそれを読み、顔から火の発する思いである。恥
ずかしさ。文字のとおり「恐縮きせん」である。私には、何もできぬ
のだ。私には、何一つ毅然きぜんたる言葉が無いのだ。祖国愛の、おく
めんも無き宣言が、なぜだか、私には、できぬのだ。こつそり戦
線の友人たちに、卑屈な手紙を書いているだけなのである。（私
は、いま何もかも正直に言ってしまうかと思つてゐる。）私の慰

問の手紙は、実に、下手くそなのである。嘘ばかり書いている。自分ながら呆れるほど、齒の浮くような、いやらしいお世辞なども書くのである。どうしてだろう。なぜ私は、こんなに、戦線の人に対して卑屈になるのだろうか。私だって、いのちをこめて、いい芸術を残そうと努めている筈では無かったか。そのたつた一つの、ささやかな誇りをさえ、私は捨てようとしている。戦線からも、小説の原稿が送られて来る。雑誌社へ紹介せよ、というのである。その原稿は、洋箋ようせんに、米つぶくらいの小さい字で、くしやくしやくに書かれて在るもので、ずいぶん長いものもあれば、洋箋二枚くらいの短篇もある。私は、それを真剣に読む。よくないのである。その紙に書かれてある戦地風景は、私が陋屋ろうおくの机に

頬杖ついて空想する風景を一步も出ていない。新しい感動の発見が、その原稿の、どこにも無い。「感激を覚えた。」とは、書いてあるが、その感激は、ありきたりの悪い文学に教えこまれ、こんなところで、こんな工合ぐあいに感激すれば、いかにも小説らしくなる、「まとまる」と、いい加減に心得て、浅薄に感激している性質のものばかりなのである。私は、兵隊さんの泥と汗と血の労苦を、ただ思うだけでも、肉体的に充分にそれを感じ取できるし、こちらが、何も、ものが言えなくなるほど崇敬している。崇敬という言葉さえ、しらしらしいのである。言えなくなるのだ。何も、言葉が無くなるのだ。私は、ただしゃがんで指でもって砂の上に文字を書いては消し、書いては消し、しているばかりなのだ。何

も言えない。何も書けない。けれども、芸術に於いては、ちがうのだ。齒が、ぼろぼろに欠け、背中は曲り、ぜんそくに苦しみながらも、小暗い露路で、一生懸命ヴァイオリンを奏している、か
の見るかげもない老爺ろうやの辻音楽師つじを、諸君は、笑うことができる
であろうか。私は、自身を、それに近いと思っている。社会的に
は、もう最初から私は敗残しているのである。けれども、芸術。
それを言うのも亦また、実に、てれくさくて、かなわぬのだが、私は
痴こけの一念で、そいつを究明しようと思う。男子一生の業として、
足りる、と私は思っている。辻音楽師には、辻音楽師の王国が在
るのだ。私は、兵隊さんの書いたいくつかの小説を読んで、いけ
ないと思った。その原稿に対しての、私の期待が大きすぎるのか

も知れないが、私は戦線に、私たち丙種のものには、それこそ逆^さ立ち^{かた}したって思いつかない全然新しい感動と思索が在るのではないかと思つてゐるのだ。茫^{ぼう}洋^{よう}とした大きなもの。神を眼のまえに見るほどの永遠の戦^{せん}慄^{りつ}と感動。私は、それを知らせてもらいたいのだ。大げさな身振りでなくともよい。身振りは、小さいほどよい。花一輪に託して、自己のいつわらぬ感激と祈りとを述べるがよい。きつと在るのだ。全然新しいものが、そこに在るのだ。私は、誇りを以て言うが、それは、私の芸術家としての小さな勤^{かん}でもつて、わかっているのだ。でも、私には、それを具体的には言えない。私は、戦線を知らないのだから。自己の経験もせぬ生活感情を、あてずっぽうで、まことしやかに書くほど、それ

ほど私は不遜ふそんな人間ではない。いや、いや、才能が無いのかも知れぬ。自身、手さぐつて得たところのものでなければ、絶対に書けない。確信の在る小さい世界だけを、私は踏み固めて行くより仕方がない。私は、自身の「ぶん」を知っている。戦線のこと、戦線の人に全部を依頼するより他は無いのだ。

私は、兵隊さんの小説を読む。くやしいことには、よくないのだ。ご自分の見たところの物を語らず、ご自分の曾かつて読んだ悪文学から教えられた言葉でもって、戦争を物語っている。戦争を知らぬ人が戦争を語り、そうしてそれが内地でばかな喝かつさい采を受けているので、戦争を、ちゃんと知っている兵隊さんたちまで、そのスタイルの模倣をしている。戦争を知らぬ人は、戦争を書く

な。要らないおせっかいは、やめろ。かえって邪魔になるだけではないのか。私は兵隊さんの小説を読んで、内地の「戦争を望遠鏡で見ただけで戦争を書いている人たち」に、がまんならぬ憎悪を感じた。君たちの、いい気な文学が、無垢むくな兵隊さんたちの、「ものを見る眼」を破壊させた。これは、内地の文学者たちだけに言える言葉であつて、戦地の兵隊さんには、何も言えない。くたくたに疲れて、小閑を得たとき、蠟燭ろうそくの灯の下で懸命に書いたのだろう。それを思えば、芸術がどうのこうのと自分の美学を展開するどころでは無い。原稿に添えて在るお手紙には、明日知れぬいのちゆえ、どうか、よろしくたのみます、と書いているのだ。私は、その小説を、失礼だが、（私には、その資格がないの

だが、少し細工する。そうして妻に言いつけて、そのくしやくしやの洋箋の文字を、四百字詰の原稿用紙に書き写させる。三十何枚、というのが、一ばん長かった。私は、それを、ほうぼうの職業雑誌に、たのむのである。「割に素直に書かれて在ると思えますから、いい作品だと思いますから、どうかよろしくお願いいたします。私みたいな、不徳の者が、兵隊さんの原稿を持ち込みするということに、唐突の思いをなされるかも知れませんが、けれども人間の真情はまた、おのずから別のもので、私だって、」と書きかけて、つい、つまずいてしまうのだ。何が「私だって」だ。嘘も、いい加減にしろ。おまえは、いま、人間の屑くず、ということになっているのだぞ。知らないのか。

私は、それを知っている。いやになるほど、知らされている。それだからこそ、つい、つまずいてしまうのだ。私は、五年まえに、半狂乱の一期間を持ったことがある。病気がなおって病院を出たら、私は焼野原にひとりぽつんと立っていた。何も無いのだ。文字どおり着のみ着のままである。在るものは、不義理な借財だけである。かみなりに家を焼かれて瓜の花。そんな古人の句の酸鼻が、胸に焦げつくほどわかるのだ。私は、人間の資格をさえ、剥奪はくだつされていたのである。

私は、いま、事実を誇張して書いてはいけない。充分に気をつけて書いているのであるから、読者も私を信用していいと思う。れのひとりよがりの誇張法か、と鼻であしらわれるのが、何よ

り、いやだ。当時、私は、人から全然、相手にされなかつた。何を言つても、人は、へんな眼つきをして、私の顔をそつと盗み見て、そうして相手にしないのだ。私についての様々の伝説が、ポ
ンチ画が、さかしげな軽侮けいぶの笑いを以て、それからそれと語り継
がれていたようであるが、私は当時は何も知らず、ただ、街頭を
うろろうしていた。一年、二年経つうちに、愚鈍の私にも、少し
ずつ事の真相が、わかつて来た。人の噂うわさに依れば、私は完全に狂
人だったのである。しかも、生れたときからの狂人だったのであ
る。それを知つて、私は爾来じらい、唾になつた。人と逢いたくなくな
つた。何も言いたくなくなつた。何を人から言われても、外面た
だ、にこにこ笑つていることにしたのである。

私は、やさしくなつてしまった。

あれから、もう五年経つた。そうして今でもなお私は、半きちがいと思われているようだ。私の名前と、そうしてその名前にからまる伝説だけを聞き、私といちども逢つたことの無い人が、何かの会で、私の顔を、気味わるそうに、また不思議なものを見るような、なんとも言えない失敬な視線で、ちらちら観察しているのを、私はちゃんとして知っている。私がかわや厠かわやに立つと、すぐその背後で、「なんだ、だぞい太宰だぞいつて、そんな変つたやつでも無いじゃないか。」と大声で言うのが、私の耳にも、ちらとはいることがあつた。私は、そのたびごとに、へんな気がする。私は、もう、とうから死んでいのに、おまえたちは、気がつかないのだ。たましいだ

けが、どうにか生きて。

私は、いま人では無い。芸術家という、一種奇妙な動物である。この死んだ屍むくろを、六十歳まで支え持つてやって、大作家というものをお目にかけて上げようと思つてゐる。その死骸が書いた文章の、秘密を究明しようたつて、それは無駄だ。その亡霊が書いた文章の真似をしようたつて、それもかなわぬ。やめたほうがいい。ここにこ笑つてゐる私を、太宰ぼけたな、と囁ささやいてゐる友人もあるようだ。それは間違いないのだ、呆ぼけたのだ、けれども、——と言いかけて、あとは言わぬ。ただ、これだけは信じたまえ。

「私は君を、裏切ることは無い。」

エゴが喪失してしまつてゐるのだ。それから、——と言いかけ

て、これも言いたくなし。もう一つ言える。私を信じないやつは、
ばかだ。

さて、兵隊さんの原稿の話であるが、私は、てれくさいのを堪こら
えて、^{へんしゅうしゃ}編輯者へんしゅうしゃにお願いする。ときたま、載せてもらえること
がある。その雑誌の広告が新聞に出て、その兵隊さんの名前も、
立派な小説家の名前とならんでいるのを見たときは、私は、六年
まえ、はじめて或る文芸雑誌に私の小品が発表された、そのとき
の二倍くらい、うれしかった。ありがたいと思つた。早速さつそく、編
輯者へ、千万遍のお礼を述べる。新聞の広告を切り抜いて戦線へ
送る。お役に立った。これが私に、できる精一ぱいの奉公だ。戦
線からも、ばんざいであります、という無邪気なお手紙が来る。

しばらくして、その兵隊さんの留守宅の奥さんから、もつたない言葉の手紙が来る。銃後奉公。どうだ。これでも私はデカダシカ。これでも私は、悪徳者か。どうだ。

しかし、私はそれを誰にも言えぬ。考えてみると、それは婦女子の為^なすべき奉公で、別段誇るべきほどのことでも無かった。私はやっぱり阿呆^{あほう}みたいに、時流にうとい様子の、謂^いわば「遊戯文学」を書いている。私は、「ぶん」を知っている。私は、矮小の市民である。時流に対して、なんの号令も、できないのである。さすがにそれが、ときどき侘^わびしくふらと家を出て、石を蹴り蹴り路を歩いて、私は、やはり病気なのであろうか。私は小説というものを間違つて考えているのであろうか、と思案にくれて、い

や、それで無いと打ち消してみても、さて、自分に自信をつける
 特筆大書の想念が浮ばぬ。確乎かつこたる言葉が無いのだ。のどまで出
 かかっているような気がしながら、なんだか、わからぬ。私は漂
 泊の民である。波のまにまに流れ動いて、そうしていつも孤独で
 ある。よいしよと、水たまりを飛び越して、ほっとする。水たま
 りには秋の空が写つて、雲が流れる。なんだか、悲しく、ほっと
 する。私は、家に引き返す。

家へ帰ると、雑誌社の人に来て待つていた。このごろ、ときど
 き雑誌社の人や、新聞社の人が、私の様子を見舞いに来る。私の
 家は三鷹みたかの奥の、ずつと奥の、畑の中に在るのであるが、ほとん
 ど一日がかりで私の陋屋ろうおくを捜しまわり、やあ、ずいぶん遠いの

ですね、と汗を拭きながら訪ねて来る。私は不流行の、無名作家なのだから、その都度たいへん恐縮する。

「病気は、もう、いいのですか？」必ず、まず、そうきかれる。私は馴れているので、

「ええ、ふつうの人より丈夫です。」

「どんな工合だったんですか？」

「五年まえのことです。」と答えて、すましている。きちがいでした、などとは答えたくない。

「噂では、」と向うのほうから、白状する。「ずいぶん、ひどかったように聞いていますが。」

「酒を呑んで^のいるうちに、なりました。」

「それは、へんですね。」

「どうしたのでしょうか。」主人も、客と一緒に不思議がつてい
る。「なおっていないのかも知れませんが、まあ、なおった
ことにしているのです。際限がないですものね。」

「酒は、たくさん呑みますか？」

「ふつうの人くらいは呑みます。」

その辺の応答までは、まず上出来の部類なのであるが、あと、
だんだんいけなくなる。しどろもどろになるのである。

「どう思います、このごろの他の人の小説を、どう思います。」
と問われて、私は、ひどくまごつく。敢かんぜん然たる言葉を私は、何
も持っていないのだ。

「そうですねえ。あんまり読んでいないのですが、何か、いいのがありますか？　読めば、たいてい感心するのですが、とにかく、皆よく、さっさと書けるものだと、不思議な気さえするのです。皮肉じゃ無いんです。からだが丈夫なのでしようかね。実に、皆、すらすら書いています。」

「Aさんの、あれ読みましたか。」

「ええ、雑誌をいただいたので読みました。」

「あれは、ひどいじゃないか。」

「そうかなあ。僕には面白かったんですが。もつと、ひどい作品だつて、たくさんあるんじゃないですか？　何も、あれを殊更ことさら

に非難するては無いと思うんですが。どんな、ものでしよう。何

せ、僕は、よく知らないので。」私の答弁は、こうかつ狡猾の心から、こんな煮え切らないのでは無く、むしろ、卑屈の心から、こんなに、不明瞭になつてしまふのである。皆、私より偉いような気がしているし、とにかく誰でも一生懸命、精一ぱいで生きているのが判つているし、私は何も言えなくなるのだ。

「Bさんを知っていますか？」

「ええ、知っています。」

「こんど、あのひとに小説を書いていただくことになっていきますが。」

「ああ、それは、いいですね。Bさんは、とてもいい人です。ぜひ書いてもらいなさい。きっと、いま素晴らしいのが書けると思ひ

ます。Bさんには、以前、僕もお世話になったことがあります。」
お金を借りているのだ。

「あなたは、どうです。書けますか？」

「僕は、だめです。まるつきり、だめです。下手くそなんです。恋愛を物語りながら、つい演説口調になったりなんかして、ひとりで呆れて笑ってしまふことがあります。」

「そんなことは無いだろう。あなたは、これまで、若いジエネレエシヨンのトップを切っていたのでしよう？」

「冗談じゃない。このごろは、まるで、ファウストですよ。あの老博士の書齋での眩つぶやきが、よくわかるようになりました。ひどく、ふけちゃったんですね。ナポレオンが三十すぎたらもう、わが余

生は、などと言っていたようですが、あれが判つて、可笑おかしくて仕様が無い。」

「余生ということ、あなたが自身に感じるのですか？」

「僕は、ナポレオンじゃ無いし、そんな、まさか、そんな、まるで違うのですが、でも、ふつと余生を感じることはありませんね。」

僕は、まさか、ファウスト博士みたいに、まさか、万巻の書を読んだわけでは無いんですが、でも、あれに似た虚無を、ふつと感じることがあるんですね。」ひどくしどろもどろになって来た。

「そんなことじゃ、仕様が無いじゃないですか。あなたは、失礼ですけど、おいくつですか。」

「僕は、三十一です。」

「それじゃ、Cさんより一つ若い。Cさんは、いつ逢つても元気ですよ。文学論でもなんでも、実に、てきぱき言います。あの人の眼は、実にいい。」

「そうですね。Cさんは、僕の高等学校の先輩ですが、いつも、うるんだ情熱的な眼をしていますね。あの人も、これからどんどん書きまくるでしょう。僕は、あの人を好きですよ。」そのCさんにも、私は五年前、たいへんな迷惑をかけている。

「あなたは一体、」と客も私の煮え切らなさに腹が立って来た様子で語調を改め、「小説を書くに当ってどんな信条を持っているのですか。たとえば、ヒュウマニテイだとか、愛だとか、社会正義だとか、美だとか、そんなもの、文壇に出てから、現在まで、

またこれからも持ちつづけけて行くだろうと思われるもの、何か一つでもありますか。」

「あります。悔恨かいこんです。」こんどは、打てば響くの快調を以て、即座に応答することができた。「悔恨の無い文学は、屁へのかつぱです。悔恨、告白、反省、そんなものから、近代文学が、いや、近代精神が生れた筈なんですね。だから、——」また、どもつてしまった。

「なるほど、」と相手も乗り出して来て、「そんな潮流が、いま文壇に無くなってしまったのですね。それじゃ、あなたは梶井基次郎などを好きでしょうね。」

「このごろ、どうしてだか、いよいよ懐かしくなつて来ました。」

僕は、古いのかも知れませんが。僕は、ちつとも自分の心を誇つていません。誇るどころか、実に、いやらしいものだど恥じています。宿業しゆくごうという言葉は、どういう意味だか、よく知りませんけれど、でもそれに近いものを自身に感じています。罪の子、というと、へんに牧師さんくさくなつて、いけません、なんといつたらいいのかなあ、おれは悪い事を、いつかやらかした、おれは、汚ねえ奴やつだという意識ですね。その意識を、どうしても消すことができないので、僕は、いつでも卑屈なんです。どうも、自分でも、閉口なのですが、——でも、「言いかけて、またもや、つまずいてしまった。聖書のことを言おうと思つたのだ。私は、あれで救われたことがある、と言おうと思つたのだが、どうもて

れくさくて、言えない。いのちは糧かてにまさり、からだは衣ころもに勝るならずや。空飛ぶ鳥を見よ、播まかず、刈まらず、倉に収めず。野の百合ゆりは如何いかにして育つかを思え、勞せず、紡つむがざるなり、されど榮華を極めしソロモンだに、その服装よそおいこの花の一つにも如しかざりき。きようありて明日、炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝ならをや。汝なら、之これよりも遙すくかに優すぐる者ならずや。というキリストの慰めが、私に、「ポオズでなく」生きる力を与えてくれたことが、あつたのだ。けれども、いまはどうにも、てれくさくて言えない。信仰というものは、黙つてこつそり持っているのが、ほんとうで無いのか。どうも、私は、「信仰」という言葉さえ言い出しにくい。

それから、いろいろとまた、別の話もしたが、来客は、私の思想の歯切れの悪さに、たいへん失望した様子でそろそろ帰り仕度をはじめた。私は、心からお気の毒に感じた。何か、すつきりしたい言葉が無いものかなあ、と思案に暮れるのだが、何も無い。私は、やはり、ぼんやり間拔まぬけ顔である。きつと私を、いま少し出世させてやろうと思つて、私の様子を見に来てくれたのにちがいないと、その来客の厚志が、よくわかつているだけに、なおさら、自身のぶざまが、やり切れない。お客が帰つて、私は机の前に呆然と坐つて、暮れかけている武蔵野の畑を眺めた。別段、あらたまつた感慨もない。ただ、やり切れなく侘わびしい。

なんじを訴うる者と共に途みちに在あるうちに、早く和解せよ。恐ら

くは、訴うる者なんじを審判人さばきびとにわたし、審判人は下役したやくにわたし、遂になんじは獄ひとやに入れられん。誠に、なんじに告ぐ、一いちり厘りんも残りなく償わずば、其処そこを出づること能あたわじ。(マタイ五の二十五、六。)これあ、おれにも、もういちど地獄が来るのかな? と、ふと思う。おそろしく底から、ごうと地鳴じなりが聞えるよ
うな不安である。私だけであろうか。

「おい、お金をくれ。いくらある?」

「さあ、四、五円はございましょう。」

「使つてもいいか。」

「ええ、少しは残して下さいね。」

「わかつてる。九時ごろ迄には帰る。」

私は妻から財布を受け取って、外へ出る。もう暮れている。霧きりが薄くかかっている。

三鷹駅ちかくの、すし屋にはいった。酒をくれ。なんという、だらしない言葉だ。酒をくれ。なんという、陳腐な、マンネリズムだ。私は、これまで、この言葉を、いったい何百回、何千回、繰り返かえたことであろう。無智な不潔な言葉である。いまの勢に、くるしいなんて言って、酒をくらって、あっぱれ深刻ぶつて、いい気になっている青年が、もし在ったとしたなら、私は、そいつを、ぶん殴る。躪ちゆうちよ躪ちゆうちよせず、ぶん殴る。けれども、いまの私は、その青年と、どこが違うか。同じじゃないか。としをとっているだけに、尚なおさら不潔だ。いい気なもんだ。

私は、まじめな顔をして酒を呑む。私はこれまで、何千升、何万升、の酒を呑んだことか。いやだ、いやだ、と思いつつ呑んでいる。私は酒がきらいなのだ。いちどだつて、うまい、と思つて呑んだことが無い。にがいものだ。呑みたくないのだ。よしいのだ。私は飲酒というものを、罪悪であると思つている。悪徳にきまつている。けれども、酒は私を助けた。私は、それを忘れていない。私は悪徳のかたまりであるから、つまり、毒を以て毒を制するというかたちになるのかも知れない。酒は、私の発狂を制止してくれた。私の自殺を回避させてくれた。私は酒を呑んで、少し自分の思いを、ごまかしてからでなければ、友人とでも、ろくに話のできないほど、それほど卑屈な、弱者なのだ。

少し酔って来た。すし屋の女中さんは、ことし二十七歳である。いちど結婚して破れて、ここで働いているという。

「だんな、」と私を呼んで、テエブルに近寄って来た。まじめな顔をしている。「へんな事を言うようですけれど、」と言いかけて帳場のほうを、ひよいと振りむいて覗き、それから声を低めて、「あのお、だんなのお知合いの人で、私みたいのを、もらって下さるようなかた無いでしょうか。」

私は女中さんの顔を見直した。女中さんは、にこりともせず、やはり、まじめな顔をしている。もとからちゃんとしたまじめな女中さんだったし、まさか、私をからかっているのでもなからう。「さあ、」私も、まじめに考えないわけにいかなくなった。「無

いこともないだろうけど、僕なんかそんなことたのんだって、仕様がないですよ。」

「ええ、でも、心易いお客さん皆に、たのんで置こうと思つて。」
 「へんだね。」私は少し笑つてしまった。

女中さんも、片頬を微笑でゆがめて、

「だんだん、としとるばかりですし、ね。私は初めてじゃないのですから、少しおじいさんでも、かまわないのです。そんないいところなぞ望んでいませんから。」

「でも、僕は心当たりないですよ。」

「ええ、そんなに急ぐのではないから、心掛けて置いて下さいまし。あのう、私、名刺があるんですけれど、」
 袂たもとから、そそくさと小

さい名刺を出した。「裏に、ここの住所も書いて置きましたから、もし、適当のかたが見つかったら、ごめんどうでも、ハガキか何かで、ちよつと教えて下さいまし。ほんとうに、ごめいわくさまです。子供が幾人あつても、私のほうは、かまいませんから。ほんとうに。」

私は黙つて名刺を受け取り、袂に入れた。

「探してみますけれど、約束はできませんよ。お勘定をねがいませ。」

そのすし屋を出て、家へ帰る途々、^{すこぶ}頗るへんな気持ちであつた。現代の風潮の一端を見た、と思つた。しらじらしいほど、まじめな世紀である。押すことも引くこともできない。家へ帰り、私は

再び唾である。黙って妻に、いくぶん軽くなつた財布を手渡し、何か言おうとしても、言葉が出ない。お茶漬をたべて、夕刊を読んだ。汽車が走る。イマハ山中、イマハ浜、イマハ鉄橋ワタルゾト思ウマモナク、——その童女の歌が、あわれに聞える。

「おい、炭は大丈夫かね。無くなるという話だが。」

「大丈夫でしょう。新聞が騒ぐだけです。そのときは、そのときで、どうにかなりますよ。」

「そうかね。ふとんをしいてくれ。今晚は、仕事は休みだ。」

もう酔いがさめている。酔いがさめると、私は、いつも、なかなか寝つかれない性分なのだ。どさんと大袈裟おおげさに音たてて寝て、また夕刊を読む。ふつと夕刊一ぱいに無数の卑屈な笑顔があらわ

れ、はつと思う間に消え失せた。みんな、卑屈なのかなあ、と思う。誰にも自信が無いのかなあ、と思う。夕刊を投げ出して、両方の手で眼玉を押しつぶすほどに強くぎゅつとおさえる。しばらく、こうしているうちに、眠たくなって来るような迷信が私にあるのだ。けさの水たまりを思い出す。あの水たまりの在るうちは、——と思う。むりにも自分にそう思い込ませる。やはり私は辻音楽師だ。ぶざまでも、私は私のヴァイオリンを続けて奏するより他はないのかも知れぬ。汽車の行方は、ゆくえ志士にまかせよ。「待つ」という言葉が、いきなり特筆大書で、ひたい額に光った。何を待つやら。私は知らぬ。けれども、これは尊い言葉だ。唾の鷗は、沖をさまよい、そう思いつつ、けれども無言で、さまよいつづける。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年10月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月刊行

初出：「知性」

1940（昭和15）年1月

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年11月22日公開

2012年8月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳴

——ひそひそ聞える。なんだか聞える。

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 太宰治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>